

ラジオドラマ用オリジナルシナリオ

One Shot Story Series

「シンデレラロード（第2話）」

作・牛

《キャスト紹介》

- | | | |
|------|-----|-------------------------------------|
| 刑 事 | ・・・ | 生田署・捜査1課の刑事。
ヒョウヒョウとした性格。 |
| 男性客 | ・・・ | 伊藤寿浩（27才）
伊藤商事の御曹子。
香住華子の婚約者。 |
| マスター | ・・・ | 女性バーテンダー。 |

《 舞 台 》

港が近くにあるBAR「サンドリオン」。
店内には常にジャズが流れている。

(PLAY-1)

S E ドアの開閉の音

マスター : いらっしゃいませ。
刑事 : こんばんわ。
マスター : どうぞ、こちらへ。
刑事 : ああ、どうも・・・
マスター : お飲み物、何にいたしましょうか？
刑事 : ああそうですね・・・じゃ水割りを下さい。
マスター : かしこまりました。

S E ドリンクを作る音

刑事 : いいお店ですね、シャレてて。
マスター : ありがとうございます。
刑事 : こういう所に来るお客さんは、やっぱり若い人達が多いんでしょなあ。
マスター : そうですね。
刑事 : 私なんか場違いですな。
マスター : いえ、そんなことございません・・・お待たせしました。
刑事 : ありがとう。置ってる物もシャレてて、あの時計なんかなんて言いましたっけ・・・
マスター : アンティーク・・・
刑事 : そうそうアンティークで・・・あれ、もう 12 時ですか？
マスター : いえ、あの時計は 12 時を指したままなんです。
刑事 : あ、成程。飾り物・・・
マスター : 店の名前がサンドリオンと申しますので・・・
刑事 : サンドリオン？
マスター : 英語でシンデレラという意味です。
刑事 : ああそうか、全く無知なもんで、お恥ずかしい。シンデレラ、だから 12 時で止まった時計ですか。ありがとうございます、1 つ勉強になりました。

(PLAY-2)

刑 事 : 不躰けなことをお聞きしますが、香住華子という女性をご存知ですか？

マスター : ええ・・・

刑 事 : ここへはよく来られてました？

マスター : (躊躇) それは・・・

刑 事 : 名乗るのが遅れてすみません。私、生田署の捜査1課の谷水と申します。

マスター : 刑事さん？！

刑 事 : いえ、先週の金曜日にちょっと事件がありまして・・・コロシなんです。

マスター : 殺人事件！

刑 事 : 殺されたのは山東会という組に所属している真鍋智彦。若いチンピラです。

マスター : はい・・・

刑 事 : まあ恨まれ事が多い奴でして、容疑者は何人か出てきてるんですけど・・・

マスター : 華子さんとも何か関係があるのですか？

刑 事 : ええ、捜査上ちょっと香住さんの名前が・・・

マスター : まさか・・・

刑 事 : チンピラ風の男と彼女が以前ここへ来たことは？

マスター : いいえ1度も。

刑 事 : そんな話を彼女がしたことは？

マスター : いいえ・・・

刑 事 : そうですか・・・

マスター : まさか、華子さんが容疑者の1人に・・・

刑 事 : それはまだなんとも・・・それに華子さんには事件当夜にはアリバイがちゃんとありますし・・・

マスター : いつの事と申されました？

刑 事 : 先週の金曜日の深夜です。

マスター : 先週の金曜日でしたら、確か華子さんは婚約者の伊藤様とご一緒にここへ寄られましたけど・・・

刑 事 : ええ、伊藤さんもそう証言なさってます。

(PLAY-3)

S E ドアの開閉の音

マスター : いらっしゃいませ。
男性客 : (勢い込んで) 刑事さん、まだこれ以上聞き足りないことがあるんですか！
刑事 : これは伊藤さん、お疲れのところ申し訳ありません。
男性客 : 全くあなたの捜査は検討はずれだと思いますよ。
刑事 : とにかく、まあこちらへ。
男性客 : マスター、聞いて下さいよ。この刑事ったら全く何を考えてるのやら。まるで華子を犯人のように聞いてきて・・・
刑事 : いいえ、そんな、ただ形式的なものでして・・・まあ、お飲み物でも召し上がって下さい。
男性客 : ビールを・・・
マスター : かしこまりました。

S E ドリンクを作る音

男性客 : どんな形式的なものかしれませんが、一つ間違えばあなたの刑事としてのクビが飛びますよ。神戸の伊藤商事といえはご存知のはず。
刑事 : そりゃもう・・・
男性客 : 華子はその伊藤商事を継ぐ僕の婚約者だ。
刑事 : ええ・・・
男性客 : それを肝に命じて言葉してください。判りましたね。
刑事 : はい、よーく命じておきます。
マスター : お待たせしました。
男性客 : それでこれ以上何を？
刑事 : もう1度話を整理させて下さい。マスターも出来ればご一緒をお願いします。
男性客 : また同じことをいわせる気か？
刑事 : すみません、私頭の回転が遅いものですから・・・

(PLAY-4)

刑事 : 先週の金曜日8時30分頃あなたと華子さんはこのお店に立寄ってます。
マスター : はい、確かに・・・

刑 事 :そして 10 時過ぎに店を出ました。間違いありませんか？
マスター :ええ・・・
刑 事 :その時間をなぜマスターは覚えていましたか？
マスター :確か、華子さんが時間を気にして、私がお教えしたと思います。
刑 事 :その後あなたと華子さんは六甲山のあなたの別荘へ行きました。
男性客 :ええ、ご覧になったでしょう。どうしてもこの人が見たいというもんだから昨日この人と行ったんですよ。
刑 事 :それは素晴らしい別荘でした。我々貧乏人には手の届かない見事なものでしたよ。
男性客 :そんなことはいいから・・・
刑 事 :あ、すみません。あの日も私と行った同じルートで？
男性客 :ええ、そうですよ。
刑 事 :片道だところから 54 分掛かります。その日はあなたの運転ではなく、華子さんの運転で行った。
男性客 :ああ、ちょっとここで飲み過ぎちゃって・・・僕はあまり強い方じゃないもので・・・
刑 事 :じゃ華子さんはお飲みではなかった？
男性客 :飲酒の疑いで逮捕する気ですか？！
刑 事 :いいえ、とんでもない。
男性客 :華子が別荘まで運転していきました。でもあそこまでは 1 本道です。他を通るとは思えません。
刑 事 :思えない？
男性客 :あ、実は別荘に着くまで僕は眠ってました。最後に頂いたカクテルが効いたみたいです。
刑 事 :カクテル？
マスター :シンデレラ・ロードです。

(PLAY-5)

刑 事 :これがシンデレラ・ロードですか。いやあ綺麗な色合いですね。(飲む) 美味しいです。
マスター :ありがとうございます。
刑 事 :これを飲んだら酔いが急に回って来たのですね？
男性客 :フラついてグラスを壊しちゃましたよね。

マスター : いいえ、あれは華子さんの肘が当たったのです。
男性客 : そうですか、てっきり僕が倒したのかと思った。
刑事 : じゃあなたはその後眠っていたわけですか？
男性客 : ええ、でも眠っていたといっても、別荘に着くとすぐ華子に起こされましたよ。
刑事 : それからはずっと華子さんにご一緒だった。
男性客 : ええ、日曜日帰ってくるまで片時も離れずにね。
刑事 : その日、正確には翌日土曜日の午前零時から午前2時もご一緒だった？
男性客 : 犯行時刻ですか？でも残念ながらその時もね。そうだ、1時近くにここへ電話を入れたはずだ。ね、マスター。
マスター : はい、確かに丁度午前1時でした。
刑事 : ご用件は？
マスター : 華子さんが時計をお忘れになっっていて、それをお確かめに。
男性客 : 彼女は金属アレルギーで、時計をすぐはずす癖があるものですから。
刑事 : なるほど・・・時計で思い出しましたが、あなた別荘で古い、ほらここにもあるようなあんなアンティークな時計の時間を昨日合わせていましたよね。
男性客 : あれは時間を合わせていたんじゃないですよ。あの時計は古いものでもう動きませんから。
刑事 : 動かないのになぜ？
男性客 : 祖父が常に3時に合わせていたのです。3という数字は祖父の一番好きな数字だったのです。だから大切な行事はすべて3がつく日を選んでました。ちなみに僕達の結婚式も3月の23日です。掃除の人か管理人が間違えて触ったのでしょう。
刑事 : ラッキーナンバーですか・・・

(PLAY-6)

刑事 : 他に別荘内で何か変わったような感じはありませんでしたか、例えば置いてる物の位置だとか・・・
男性客 : いいえ何も。あの夜は雰囲気も最高でしたよ。昔歌であったじゃありませんか、夜霧よ今夜もありがとうって。
刑事 : 霧ですか・・・

男性客 : ええ、着いてすぐにまるでそこだけが別世界のように、
幻想的で世俗から僕達を自然が離してくれたんだって華子
と話しました。

刑事 : 別世界ですか、うーん (考え込む)

男性客 : 他にお聞きしたいことは？

刑事 : いいえ。

男性客 : そうでしょう。聞けば聞くほど華子の身の潔白は確かにな
るでしょう。これで僕は失礼しますよ。いいですか、僕は
すぐにあなたがお困りになる手を打つつもりですからね。
脅しじゃありません。それじゃマスター。

マスター : ありがとうございます。

S E ドアの開閉の音

刑事 : (唸る) うーん・・・

マスター : 彼は華子さんを庇って嘘を言ってるようには見えませんが。

刑事 : ええ、彼は嘘をついてません。

マスター : それじゃ・・・

刑事 : 彼の証言は事実でしょう、おそらく・・・

マスター : 彼はあなたを告訴なさりますよ。

刑事 : そうみたいですな・・・

マスター : でも刑事さんはあくまで華子さんを・・・

刑事 : いやあマスターもお優しいお顔をしてるのに、なかなか鋭
いですなあ・・・

マスター : ではやっぱり・・・

刑事 : 失業しても私みたいなのは無理ですな。バーテンダーには
ハハハ・・・おっと何時かな、そうかあの時計は止まっ
てるんではないか・・・ん？

マスター : どうかされましたか？

刑事 : 今日は時計が、よく話に出てきますね・・・シンデレラ・
ロード、か・・・

つづく